

世界的プログレッシヴロックバンド 元「イエス」の  
キーボードプレイヤー パトリックモラーツも絶賛！  
A.P.J. ニューアルバム「e」について、各曲解説と  
その魅力を語る。

---

#### コメント：Patrick Moraz (パトリックモラーツ)

スイス・モルジュ生まれ。プログレッシヴロックバンド「イエス」のキーボードとして、アルバム「リレイヤー」に参加。その他アメリカ映画「Predator」や、ヨーロッパ映画「The Salamander」など、数多くの映画音楽を手掛ける。モラーツの卓越したキーボードテクニックは非常に評価が高い。

---

今回Vega Musicから発売されるA.P.J.の新作は、全9曲オリジナル作品からなる複雑難解なアルバムである。このアルバムは、トリッキーなリズムパターンや変拍子を多く含んでいる。実際にアルバムを聴けば恐らくわかると思うが、プログレッシヴでヴァリエティーに満ちた精巧なリフ、独特なメロディーラインやコードが多用されている。

まず、この作品を音楽面から見てみよう。クリアーでパワフルなサウンドがその特徴と言えるだろう。さらに、トリオと言う最小限の楽器編成である点も見逃せない。キーボードのヒロユキ・ナンバ、アコースティック・ベースのマサトシ・ミズノ、ドラム・パーカッションのカズミ・イケナガという、トリオによる演奏は、最初から最後まで驚く程完璧である。

このアルバムに収録されている9作品には、ジャズの高い感性が結集されている。それだけでなく、独特とも言える、このような難解なスタイルの音楽に取り組んでいるその熱意と努力も見逃せない。また、このアルバムの作品には、素晴らしい音楽が反映されている。高度なテクニックと才能を持った3人のミュージシャンによる作品がここに

あり、時には彼らにインスパイアを与え、影響さえ与えている音楽がここにある。

さらに、このアルバムは、いろんなレベルから鑑賞出来る特徴を持っている。アルバムの中の作品は、どれもリスナーの知的聴覚に印象深く働き掛けてくれるはずである。プログレシヴで、とても巧妙で、そして、シンプルな程美しいコード展開。官能的なフレーズ……。その魅力的な瞬間がリスナーの心を掴んで離さない。

では、簡単ではあるが、それぞれの曲の解説をしてみよう。

<Majestic Scarecrow> は、素晴らしいアコースティック・ベース・プレイヤーであるMr.ミズノの作品である。スリルでダイナミックなリフに変拍子。ピアノとベースのユニゾン。これらのコンビネーションが魅力的な曲である。Mr.ナンバは、恐らくオアシスでプレイしていると思うが、そこでのコード進行の使い方は、とても興味深い。彼がプレイするサウンドは、贅沢な程豊かな音で構成されている。この作品は、反復的な側面を持っているのだが、それもこの曲のとても興味深いところである。このアルバムの中のベストな作品のひとつとなっている。

2曲目の<妖精写真>と呼ばれるこの作品は、Mr.ナンバが手がけた魅力的な曲である。無邪気なワルツ風で始まるこの曲は、3/4フィールのリズム加えて、変拍子リズムを含みながら複雑で難解なコード進行で展開していく曲である。美しいベースソロが作品にメリハリをつけている。同時に、バンド全体が複雑なリズムを刻み始める……。

ドラマチックなユニゾンのリフで始まる3曲目の<You think you know me >という曲も、Mr.ナンバによる曲である。この作品の中で、キーボード・プレイヤーとベース・プレイヤーが特に強調されていることは明らかである。ここでは、それぞれのプレイヤーによってジャ

ズのフィーリングが最大限に表現されている。さらに、この曲で聴けるピアニストの表現方法は、幅広いレンジを持ったプレイ・テクニクに裏付けされている。

フランス語で黒を意味するこの曲 <Noir > は、Mr.ミズノの作品である。ドラマチックな展開を含んだ後、気のきいたブロックコードを多様するところなど、ピアニストのMr.ナンバのセンスが光る。ベース・プレイヤーのMr.ミズノは、ここでもさえたプレイを織り交ぜている。さらに、CDがちょうど4分37分を表示したところで、予想もしないちょっとした驚きが訪れる。とてもピュアーで澄んだヴォーカル・ハーモニーが、この作品に超越した異次元空間を与えている。

5曲目の <パリの恋人 > は、Mr.ナンバの曲である。この曲では、コンテンポラリーなボサノバを意識したアプローチをとって、ドラマチックである。メロディーラインで展開されるコード、ピアニストとあわせて巧妙にプレイされるベースソロ。同様にここで聴かれるピアノソロは、特にこの曲の中のハイライトである。特にエンディングでのコードの使い方は力強く、すばらしい。

<Treefrog > は、Mr.ミズノの作品である。もちろんこの曲も3つの楽器だけによってプレイされている。とても複雑で難解な曲である。ピアノのハイキーを繰り返し使うところのペダル奏法的なプレイは、そのパートが他のパートより特に強調されて印象づけている。

< Green > は、Mr.イケナガの作品である。まず、この曲の最大の特徴は、なんと言ってもMr.ナンバのヴォーカルが入っている点であろう。しかし、歌詞は無く、ハーモニーで歌われている。今の時代、素敵な変化と展開を持っている曲である。ブラジル風とでも言うのであろうか、そのラテン・メロディ、力強い楽曲、ドラマチックでハーモニーの素晴らしさ。それらがこの曲の魅力である。

<クラゲ注意報>と題された8曲目のこの曲も、Mr.ナンバの手がけた作品である。ミステリアス風に始まるこの曲は、まるでサイコスリラーかなにかの合図を予感させる。ところが、いきなりテンポはジャンプし、ハッピー感のある倍音を伴って曲は進んでゆく。ベースとドラムが複雑に絡みながら、とてもセンスよくプレイされている。

アルバムの最後を飾る<God be with you>は、アルバムの中の究極的な曲として、ふさわしいタイトルである。この曲もMr.ナンバの手による可憐で美しい曲である。この曲の持つスピリチュアルな雰囲気は、確実にタイトルへ通じている。さらに、ここでのコードの使い方も素晴らしく、そして、曲のエンディングでフェイドアウトするシンセサイザーによるストリングス・・・それらすべてが再びこの曲のタイトルを思い出させてくれる・・・<God be with you>

結論として、このアルバムは、A.P.J.によって最も興味深く印象的な作品に仕上がっている。それぞれの曲は経験豊かなプレイヤーによってプレイされている。また、アルバムは、十分に練られ、仕上げられている。さらに、このアルバムの中には、2つの必要な要素が含まれている。「シンプルさ」「美しさ」がまさにそれである。また、その中に豊富な程のイマジネーションが存在することも、決して見逃せない。A.P.J.の<e>は、全てのリスナーが自分にあった楽しみ方が出来る作品と言えるだろう。

Review of A.P.J.'s new CD entitled « e »  
by Patrick Moraz © 2-20-06

---

Translated by Aki Nakabayashi (Laid Back Productions)  
Special Thanks : Brian Kelleher